

日本のリーダーが語る 世界競争力のある人材とは？

「私は理系だけれど中身は文系だ」と笑う東京医科歯科大学の大山喬史学長。医療現場では必然的に患者さんの「老い」や「苦痛」「死」と向き合うことになるため、文系的な思考が求められるという。ともに人間を相手にする学問だが、その方向は医学が個人に向かうのに対して、社会科学は社会に向かう。山内学長との対談から、両大学のコラボレーションによる社会貢献の大きな芽が見えてきた。



社会科学系の構想力と、 医療系の患者志向とのコラボレーションで社会に貢献

知と癒しの匠を創造する

山内 大学案内の大山学長のメッセージを拝読すると、随所に論語がちりばめられ、説得力があります。論語がお好きなんですね。

大山 もともと漢詩が好きだったのでありますが、あるとき、以前京都大学にいらっしやった東洋史学者の貝塚茂樹先生が論語を解説した本に触れてから、のめり込むようになりました。頼れる言葉や自分の指針となるような言葉をそこに見出して、いろいろな先生方の論語に関する本を読むようになったのです。

山内 先生は当然理系ですよ？ 漢詩が好きだったというのは面白いですね。

大山 何となく好きだったのですが……。私は理系ですが、中身は文系じゃないかな（笑）。もともと文系の人間が理系に興味を持って、理系の勉強をするようになった。医師には文系のベースが必要だと思うのです。

山内 それは、どうしてですか。

大山 東京医科歯科大学では、「知と癒しの匠を創造する」というミッションを立ち上げましたが、それとも関連しています。私は、これまで臨床医として、がんや交通事故、感染症などで顎まで失う障害の大きな患者さんと接してきました。患者さんたちからは、いろいろなことを教わります。

たくさんの悩みを聞くのですが、こうした患者さんの言葉を理解するのはかなり難しい。文系のさまざまな本を読んでもいないと、適切な受け答えができないのです。医師は、患者さんに対し「やれることはやりました」と言いがちです。しかし、私としては、医師であれば最善を尽くすのは当然のことです。結果はどうあれ「いろいろありがとうとございました」という患者さんや家族の、感謝の言葉や気持ちが返ってきて、初めて、医療人としての真の達成感があるのです。

山内 なるほど。生身の患者さんが相手だという医療現場の厳しさですね。

大山 漢方薬を入れる百味筆筒があります。私が学生に対して医師としての姿勢を語るとき、この百味筆筒を例に、学生時代はとにかくより多くの知識を吸収し、医療人として多くの引き出しを持つように言っています。患者さんを見て、自分で判断し、引き出しの中身を組み合わせ使用する。それが技術というものです。重要なのは、知識と



東京医科歯科大学長

大山喬史氏

大山喬史（おおやま・たかし） 1966年東京医科歯科大学歯学部卒業。1979年東京医科歯科大学歯学部附属病院顎口腔機能治療部教授。同大歯学部附属歯科技工士学校長、同大歯学部附属病院長、日本補綴歯科学会会長、日本スポーツ歯科医学会理事などを歴任。2003年東京医科歯科大学副学長、2005年同大学理事。2008年同大学長就任。

技術のコンビネーションです。知識をおして技術を得る。得た技術をおしてまた知識を得る。人間性をそこに加味することで、「知の匠」を創り出すことになるわけです。「癒し」は論語でいえば、「恕」に当たります。患は自分の良心に忠実なことであり、恕は他人の身になって考える知的な同情を持つこと。「惻隱の情」という言葉もありますが、患者さんの思いを理解する、そうした人格者こそ「匠」ではないでしょうか。そういう人材を育てようと、2010年に、「知と癒しの匠を創造する」というミッションを打ち出したのです。

山内 「匠」という言葉をミッションに取り入れているのが面白いですね。匠はどちらかというと伝統芸能や職人の技術などを表すときに使われる言葉です。それを、あえて医療に使ったところに、興味を持ちました。深く考えるきっかけになると思います。

大山 私は陶芸が趣味で、窯元によく行きますし、人間国宝の方との付き合いもあります。彼らの技術力については言わずもがなですが、人間的にすばらしい。言葉のひとつと言ひと言が実に奥が深いのです。医療の現場でもそうした存在が望ましいと考えて、匠という言葉を使うことにしたのです。

山内 東京医科歯科大学というと医学と歯学において日本を代表する大学ですが、姿勢はとても謙虚なですね。

患者さんこそが医師を育てる 見えない教科書

大山 4月に新人生に90分ほど「論語の世界」について話をするようにしています。学問は何のためにするのか？ 論語にも出ていますが、昔の人は自分の

のために勉強しました。しかし、今の人は、自己を顕示するために勉強するようなどころがある。目先の損得、目先の名声、目先の地位にこだわらず、「人知らずして慍^いらず」、自分を研鑽^{けん}していれば必ず誰かが見ているのです。今勉強しているのは人のためなのだと伝えていきます。では、学生時代のお前はどうかだったか？ と聞かれると少し困りますが……(笑)。

山内 こうした大山先生の感性は、臨床医として患者さんと接しているうちに、磨かれてきたのでしょうか。

大山 医師としてのあり方については患者さんに教わりましたね。大学の先生方からは、知識や技術を教わりました。さらに、患者さんと接しているなかで、新しい知識や技術を「こうしたらいいのかな」と確認することができました。患者さんが医師に面と向かってものが言えるような付き合いがないと、医師として現在の域を超えることはできません。

山内 「全部自分に任せろ。余計なことは言わない」という医師はいけませんね。

大山 論外ですね。病理学で、3大兆候というものがあります。「赤くなる」「腫れる」「熱がある」が重要な兆候です。入れ歯などでは、歯茎が赤くもなければ腫れてもいない、しかし患者さんは痛がっているということがあります。多くの医師は、「そのうち慣れますよ」と言いがちです。それではいけない



日本のリーダーが語る
世界競争力のある人材とは？

一橋大学長

山内 進

山内 進 (やまうち・すすむ) 1949年北海道小樽市生まれ。1972年一橋大学法学部卒業。1977年同大学院法学研究科博士課程修了。1987年博士(法学)取得。成城大学法学部教授、一橋大学法学部教授、法学部長、理事等を歴任。2004年、21世紀COEプログラム「ヨーロッパの革新的研究拠点」の拠点リーダーに就任。2006年副学長(財務、社会連携担当)、2010年12月一橋大学長に就任。専門は法制史、西洋中世法史、法文化史。『北の十字軍』(講談社)でサントリー学芸賞受賞。その他『新ストア主義の国家哲学』(千倉書房)、『掠奪の法観念史』(東京大学出版会)、『決闘裁判』(講談社)、『十字軍の思想』(筑摩書房)など著書多数。

いのです。どうして痛がるのか、患者さんの身になって考え、自分で対策を編み出さなければいけないのです。まさに、患者さんが先生なんです。謙虚な姿勢で臨まなくては、教科書である患者さんが見えなくなってくるのです。

「人知らずして慍らず」 大学広報の「見える化」

山内 私も先生と同じように高校に入ったときに下村湖人の『論語物語』を読んで以来、論語好きになりました。先生が論語を引いて書かれているメッセージは素晴らしいですね。誰のためでもない、患者さんのため。人に認められなくとも、自分で切磋琢磨していればいい……。一方で、卒業生からは、大学は自分たちだけがきちんとやっていたらいい、みんなわかってくれるという時代ではない、どんどん宣

伝しなさい、とよく言われます。こうした意見とのバランスをどうお考えになりますか。

大山 確かにギャップがありますね。国立大学法人は税金をいただいて運営していますから、どういう人材を育成しようとしているのか、社会に還元できるどんな研究をしているのか、地域にどんな貢献をしているのかを示さなければなりません。これが最低の義務です。また、国際交流では、自分たちの実績や、やろうとしていることを外に出していかないと理解されません。今、大学の広報の対象はいったい誰なのかを議論しているところです。対象は、患者さん、文京区民、受験生、教職員……それぞれに向けた一番いい方法はどんな手段なのかを議論しているのです。対象に見合った訴え方が必要になります。税金を使っている国立大学としては、自分たちがいかに社会に貢献しているかを「見える化」しないとイケないですね。



山内 学生個人にとっては、人知れず自分で勉強することは重要だと思います。しかし、組織としては、表に出していくことが求められるということですね。これまで大学広報誌『H.Q.』で多くの方と対談してきましたが、みなさんが「自分のことだけを考えて仕事をしてはいけない」「もっと高いもののために仕事をしてほしい」ということを語ってくださいました。私もそうだと思います。けれど、そのアピールがなかなか難しい。



大山 そうですね、単なる自慢に終わってはいけないと思います。昨年読んだ竹内政明さんの『名文ど

ろほう』という本に、井上ひさしさんの言葉がありました。特別な職業が3つある、それは医者と学者と、易者だということです。どれも自分の意見で人の生き方を変えることができるというわけです。学生との懇談会では、「人の生き方を変えるかもしれないほど責任の重い仕事だ。そこをよく考えて勉強するように。言葉が人を生かしても殺しもするわけだから、患者さんとは職人の心を持って接するように」と言っています。また、その本にアメリカの映画の話も出ていました。料理人が病気になるたとき、医師に「私はどれくらい生きられますか？」と聞いた

のです。すると医師は、「あなた次第です」と答えました。すると患者は、「あなた次第でなくてよかったですよ、先生」と言ったのです。自分の命が先生次第では困る、患者にそう言われるような医師になるなど、学生にはよく言っています。医療人としては心したい話ですね。

これからはアジア圏をアカデミックプラットホームに

山内 大学の役割は、教育と研究にあります。医学や歯学という最先端の研究には多くの資金がかかることと思いますが、特に力を入れているのはどんなところですか。

大山 現在、COEが2つ、グローバルCOEを1つ獲得して研究しています。東京医科歯科大学では、個々の先生方にすばらしい研究力があります。しかし、今の世の中は一国一城あるしの主では不十分な時代です。複数の分野で複数のフィールドを専門とする先生が、5年、10年というチームの大きなプロジェクトに立ち向かっていくことが重要なのです。優秀な研究者を集集する必要があります。

私もそうですが、多くの研究者はアメリカやヨーロッパで勉強してきました。しかし、これからはアジア圏に教育、研究の拠点を置くべきだと思います。アジア圏が重要なアカデミックプラットホームといわれるようにしたい。東京医科歯科大学では医療系でアジア圏プラットホームの担い手の一つになれるようにバンコクに教育研究拠点を作りました。

また、それとは別に、医学部の学生をトレニンクとして、主任教授の推薦を得た学生を、ガーナの野口英世記念医学研究所に4人、チリに6人を数か月

間派遣しました。常駐の研究者が異文化のなかでどういう仕事をしているか、異文化のなかの医療とは何なのか、常駐の研究者が若い研究者をどう教育しているか、それを見てくるように言っています。継続的に行うことで、国際人が育つのではないかと……。年間41人の学生を海外に送り出していますし、大学院生も海外研究奨励賞として、若干名派遣しています。最近の若い人は内向きだといわれますが、手を挙げる学生が多いので安心しています。

山内 本学では、一橋大学海外派遣留学制度という支援制度があり、今まで800人近い学生を海外へ派遣しています。来年度は、院・学部を含めて57人を派遣する予定です。ほかにも留学に関しては手厚いサポートをしていますから、かなりの数の学生が留学していますが、もっと増やしたいと考えています。

大山 留学としては、ハーバード大学には医学部の学生8人、インペリアルカレッジには4人派遣しています。

山内 それを聞くだけで、東京医科歯科大学の教育水準の高さがよくわかりますね。

大山 大学院大学ですから、もっと大学院生にも留学を推し進めていきたいと思っています。研究所への派遣も枠を広げて、行きたいところへ行かせてあげたいですね。

山内 本学では、留学先はどうしても欧米が多くなりますが、受け入れ留学生は逆にアジア圏からが多いですね。一橋のビジネススクールICSでは、韓国のソウル大学、中国の北京大学などとコンソーシアムを組んで、交流しています。

大山 私はタイ語も話しますから、個人的にはタイの無歯科医村で仕事をしたいという夢があります。向こうの言葉で挨拶ができると、ちよつと違います



日本のリーダーが語る
世界競争力のある人材とは？

ね。ところで現在、アジア圏22か国から約160人の留学生を迎え入れています。例えば、区民を巻き込んで彼らに会話教室・お国自慢をさせたらどうかと考えています。言葉を教えつつ文化も伝えていく——アジア文化を発見する雰囲気、市民を巻き込んで醸成していきたいのです。

山内 一橋大学には66か国から留学生が来ています。四大学連合*1の学長が集って、留学生と地域交流について話し合ってもいいですね。

社会の求める医療に応える 医歯学融合教育

山内 大学のあり方については、どうお考えですか。



大山 歯科大学が全国に29ありますが、問題になっているのは歯科医師の過剰感があることです。また、歯学科の定員割れなどもあります。そんななかで、大学はどのような方向に向かっていかなければならないのか、歯学教育はどうあるべきか。悩ましい問題です。医学部では高齢者医療の問題があります。4人に1人が高齢者で、また、そうした患者さんは多くの病をかかえています。つまり、自分の専門だ

*1 21世紀を迎え、グローバル化された社会において、真に国際競争に耐えうる研究教育体制を確立することを基本的理念とし、2001年に東京医科歯科大学、東京外国語大学、東京工業大学及び一橋大学で結成された大学連合。

けでは1人の患者さんに対応できないのです。さらに、口腔内の健康と全身疾患との関係も指摘されています。そこで、2011年度から医学と歯学の融合型教育をスタートさせました。

医師に欠かせない倫理学を6年間を通じて徹底的に教育し、医療統計を専門実習終了後に履修するようにするなど、6年一貫型のカリキュラムを作りしました。医学や医療は進歩していますから、基礎分野は早いうちに教育し、社会が求める医療に対応できるようにしたのです。モデルカリキュラム作りは「歯学融合研究センター」が行い、つねにカリキュラムのあり方を見直していきます。

山内 そのような環境で学んだ東京医科歯科大学出身の先生に診てもらったことができたなら、患者さんは大変安心できるでしょう。

両大学のコラボレーションで 安全・安定・安心の社会づくり

山内 ところで、先生の目から見て、医療分野にはどのような未来が広がっているとお考えですか。

大山 四大学連合を組んでいる一橋大学の学生にぜひお願いしたいことがあります。私たち医療人は、生死に近いところで医療に取り組んでいます。医師としての知識や技術を磨き、患者さん一人一人の



日本のリーダーが語る 世界競争力のある人材とは？

テラーメイド医療を実現しようと頑張っています。では、それを社会にどう還元するか？一橋大学の学生は政治や経済、法律などを通じて社会の安定と安心を築くための勉強をしています。医療をどのように社会に展開していくかという点では、一橋大学の先生方や学生のほうが長けています。医療とはどういうものかについては、東京医科歯科大学で学び、それをどう社会に展開していくかは一橋大学で学ぶ。そうした関係づくりをお願いしたいですね。

山内 スケールが大きいですね。社会のシステムのなかに医療をどう組み込んでいくのがベストなのか。どうすれば、みなさんが安心して暮らしているのか、という話ですね。医師は個人が対象なので、その対応にベストを尽くす。しかし、医療にかかわる社会的な問題もあるわけですから、確かにわれわれの立場から考えていく必要がありますね。頑張らなくてははいけません。

大山 私たちは安全と安心で社会に貢献したい。一橋大学には安定と安心の機構づくりを考えていたんだけど、社会構築には医療サイドはどうあるべきかが明確になってきます。つまり、社会の安定のために医療サイドはどのようにすればいいのか、医療教育はどのようにあるべきか……四大学が連携を強めることにより、研究・教育も含めて再構築していくことができます。

山内 現在、四大学連合の複合領域コース^{*2}として「医療・介護・経済コース」などがありますが、もっと大きな視点で考える必要がありますね。

大山 今すぐにということではなく、そうしたステップを踏んで学んだ人が、指導者として世の中の仕組みづくりをリードしてほしいと期待しています。

山内 その意味では、一橋大学の学生が東京医科歯科大学に来て学び、自分の頭で、社会における医学のあり方を考えていくことには意味がありますね。

大山 ええ。すべての学生にそうしてほしいとまではいいませんが、国や地域の政策に活かしていきたいような人材が、何人か現れてほしいと思っています。そういうことを考えながらやっていかないと日本は沈没してしまいます。

山内 一橋大学は社会科学の総合大学ですから、理系的な発想は前面に出てきません。大学の性格上、広い意味での社会をどのように良くしていくかというコンセプトがあります。社会にはいろいろな局面があります。医療ももちろんです。そこで、医療分野のトップクラスの大学と一緒にさまざまなことを行うことは、刺激になりますし、視野が広がります。これからも互いに刺激し合いながら、先生の言葉を借りれば、安全・安定・安心の社会づくりに貢献していかなければなりませんね。本日はどうもありがとうございました。



*2 1大学では提供できない教育内容を、四大学連合を構成する大学が提供し合うことによって可能とし、これまでの高等教育機関が育てることのできなかった新しい人材を育成することを目的に、2002年に設けられた、特別履修プログラム。